

広島県立美術館

研究紀要

第28号

渡辺溥子の染織世界を垣間見る（1）	福田 浩子	1(46)
ダリとアングル		
— アングルの『パンセ』を手掛かりとして	山下 寿水	9(38)
頼春水の居宅風景《嶺松廬図》と太田午庵	隅川 明宏	30(17)
日本画家・児玉希望についての新たな知見	神内 有理	46(1)

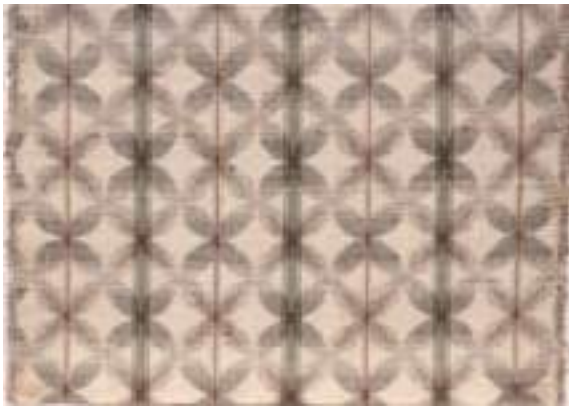
2 0 2 5



口絵1 渡辺溥子 絢織着物「薫風」 HB-297



口絵2 絢織着物「薫風」(口絵1)の下図 MB-245



口絵3 絢織着物「花七宝繫」の裂 MB-285



口絵4 絢織着物「花七宝繫」(口絵3)の下図 MB-283



口絵5 渡辺溥子 絢織着物「竹林」 HB-298



口絵6 絢織着物「竹林」(口絵5)の下図 MB-249

渡辺溥子の染織世界を垣間見る（1）

福田 浩子

1 はじめに

本稿で紹介する渡辺溥子氏は、1938（昭和13）年広島市生まれの染織作家である。絹緋を駆使して着物作品を数多く制作、日本伝統工芸展を中心とした展覧会で発表してきた。

2023年および2024年に同氏の作品および図面類を受贈したことを契機として、渡辺溥子氏の奥深い染織世界の一端を垣間見るとともに、作品制作の構想を解きほぐしてみたい。また、幼少期の作者は、原爆投下時に広島市中心部を離れていたために被曝を免れ、その日のうちに戻った市内で彷徨って、家族と再会している。このことも作者の貴重な記録として書き留めておく。

なお、本稿に掲載する作品および図面などすべての資料の作者は渡辺溥子氏である。

2 1945年8月6日のこと

作品制作に関する聞き取りをする中で、1945年8月6日前後に7歳の作者が経験されたお話を聞いた。

当時小学1年生だった上向井廣子さんは、13歳で中学1年生の姉英子さんとともに8月5日学校を休んで、能美島の父の実家へ野菜をもらいに出かけた。翌朝、能美島の山の高いところにあった場所から原爆の光とどーンという音、キノコ雲を見た二人は、何の情報もなく能美島の波止場へ向かい、そこで広島全滅と聞いたものの意味がわからず宇品港行きの船に乗船した。途中で小さな船をたくさん見かけた（怪我した人たちが宇品港から似島へ向かっていたのだと思う）。

宇品に着いたものの、市内電車は瓦礫となって走っていなかったので、電車道に沿って歩いた。島でもらってきたジャガイモやカボチャといった野菜は途中でいろんな人たちに分け与え、風呂敷だけになって比治山までたどり着いた。多聞院のちょっと行ったあたりで風呂敷をお腹にかけて野宿した。疲れ果てていたのでぐっすり眠った。いたるところに遺体や瓦礫があったので、そこしか場所がなかった。

翌7日、比較的、瓦礫の少ない電車道に妹を待たせ、姉はひとりで瓦礫の中を100メートルほど歩いて実家の焼け跡を見に行った。台所の下に大きな釜が残っていた。廣子さんはその釜を染色に使用しようと持ってきたけれども、使わないまま今も手元にある（筆者説明：染色にはステンレスの鍋を使い、鉄製は適さない）。実家へ向かった姉をひとりで待っている間に、若い夫婦がなんとかちゃんのことを探していると声をかけてきたが、その子のことは知らないと言った。そして二人は悲しそうに立ち去った。それがとても印象深く、未だに心に残っている。

その後、徒歩で尾長（広島市東区）を通って矢賀へたどりつき、列車で矢賀駅から玖村駅^{くむら}へ向かい、玖村から諸木^{もろき}まで徒歩で、母の実家の諸木（現在の広島市安佐南区）で家族と合流することができた。諸木からは同年12月には元々住んでいた金屋町にバラックを建てて戻ったという。作者は8人兄弟、長兄の上向井等さんによる「私の原爆の記録」というファイルには当時15歳だった等さんの見聞が記載されている。兄の等さん、姉の龍子さんとも中学生で、現在の平和大通り付近の建物疎開へ学徒動

員されており、偶々、8月6日は兄の動員先が廿日市であり、姉は妹と学校を休んで能美島へ行かされたのだそうだ。80年経っても、それぞれが出会った悲しい思いが沈んでいる。

3 渡辺溥子年譜

西暦	和暦	年齢	主な事項・作品情報（一部）
1938	昭和13	0	広島市に生まれる
1945	昭和20	7	8月6日能美島に行っていて原爆を免れる
1957	昭和32	19	広島県立皆実高校卒業
1959	昭和34	21	女子美術大学短期大学部図工科卒業
1961	昭和36	23	桑沢デザイン研究所入所
1964	昭和39	26	桑沢デザイン研究所卒業 女子美術大学色彩研究室助手
1969	昭和44	31	郡上工芸研究所修了 宗廣力三に師事
1970	昭和45	32	上向井廣子染織個展 広島天満屋 1970.12.4-9
1972	昭和47	34	絨織着物「朝風」第9回日本伝統工芸染織展 日本工芸会賞
1973	昭和48	35	絨織着物「網代文」第20回日本伝統工芸展初入選（広島県立美術館蔵）
1974	昭和49	36	絨織着物「薫風」第11回日本伝統工芸染織展（広島県立美術館蔵）
1975	昭和50	37	絨織着物「花七宝繫」第12回日本伝統工芸染織展 文化庁長官賞
1977	昭和52	39	絨織着物「万葉」第14回日本伝統工芸染織展
1979	昭和54	41	絨織着物「せせらぎ」第26回日本伝統工芸展
1980	昭和55	42	絨織着物「変り七宝」第27回日本伝統工芸展 絨織着物「華」（広島県立美術館蔵）
1981	昭和56	43	絨織着物「籠目」第28回日本伝統工芸展 絨織着物「響」第21回伝統工芸新作展
1982	昭和57	44	絨織着物「耀」第29回日本伝統工芸展 絨織着物「碧」第22回伝統工芸新作展
1983	昭和58	45	絨織着尺「萌黄」第23回伝統工芸新作展優秀賞 ロンドンRoyal College of Artでレクチャー「日本の緋について」
1984	昭和59	46	絨織着物「竹林」第24回伝統工芸新作展（広島県立美術館蔵）
1985	昭和60	47	絨織着尺飛び緋 第25回伝統工芸新作展
1986	昭和61	48	絨織着物花の組合わせ文 第33回日本伝統工芸展 絨織帯「かざぐるま」第26回伝統工芸新作展
1987	昭和62	49	絨織着物「光彩」第34回日本伝統工芸展 絨織着物「黄雲」第27回伝統工芸新作展 三越賞
1988	昭和63	50	絨織着物「星影」第35回日本伝統工芸展（広島県立美術館蔵） 絨織着物「潮路」第28回伝統工芸新作展
1989	平成1	51	絨織着物「燦燦」第36回日本伝統工芸展 絨織着物「花野」第26回日本伝統工芸染織展 絨織着尺「縹綢縞」第29回伝統工芸新作展
1990	平成2	52	絨織着物「安芸路」第30回伝統工芸新作展
1991	平成3	53	絨織着物「穂波」第28回日本伝統工芸染織展 絨織着物「紺青」第31回伝統工芸新作展
1992	平成4	54	絨織着物「花影」第39回日本伝統工芸展 絨織着物「古城」第32回伝統工芸新作展
1993	平成5	55	絨織着物「花連」第40回日本伝統工芸展（広島県立美術館蔵） 絨織着物「吉祥」第30回日本伝統工芸染織展 絨織着物「夜光」第33回伝統工芸新作展 日本経済新聞社賞
1994	平成6	56	絨織着物「星彩」第31回日本伝統工芸染織展 東京都教育委員会賞（広島県立美術館蔵） 絨織着尺緋大格子第34回伝統工芸新作展
1995	平成7	57	絨織着物「牡丹」第32回日本伝統工芸染織展 絨織着物「晴夜」第35回伝統工芸新作展
1996	平成8	58	絨織着物「花格子」第43回日本伝統工芸展（国立工芸館蔵）

1997	平成9	59	紬織着物「みのり」第44回日本伝統工芸展（広島県立美術館蔵） 紬織着物「春」第34回日本伝統工芸染織展 紬織着物「霞」第37回伝統工芸新作展
1998	平成10	60	紬織着物「おぼろ月」第35回日本伝統工芸染織展東京都教育委員会賞（広島県立美術館蔵）
1999	平成11	61	紬織着物「月影」第46回日本伝統工芸展日本工芸会奨励賞（広島県立美術館蔵） 紬織着物「大地」第36回日本伝統工芸染織展 紬織着物「のばな」第39回伝統工芸新作展
2000	平成12	62	紬織着物「螢影」第47回日本伝統工芸展（広島県立美術館蔵） 紬織着物「夕暮」第40回伝統工芸新作展 紬織着物「花格子」第39回日本伝統工芸富山展
2001	平成13	63	紬織着物「星月夜」第48回日本伝統工芸展 紬織着尺「花垣」第38回日本伝統工芸染織展
2002	平成14	64	紬織着物「光彩」第49回日本伝統工芸展（広島県立美術館蔵） 紬織着物「萌」第42回伝統工芸新作展
2003	平成15	65	紬織着物「静影」第43回伝統工芸新作展 第50回日本伝統工芸展広島展で講演「紬と絣に魅せられて」（広島県立美術館蔵）
2004	平成16	66	紬織着物「桜の森」第44回伝統工芸新作展（広島県立美術館蔵） 紬織着物「瀬」（広島県立美術館蔵）
2005	平成17	67	紬織着物「螢影」第52回日本伝統工芸展（広島県立美術館蔵） 紬織着物「風車」第39回日本伝統工芸染織展
2006	平成18	68	紬織着物「草垣」第40回日本伝統工芸染織展
2007	平成19	69	紬織着物「奏」第54回日本伝統工芸展（広島県立美術館蔵） 紬織絣着物「せせらぎ」第47回伝統工芸新作展
2008	平成20	70	紬織着物「風車」第55回日本伝統工芸展 紬織着物「薫風」第42回日本伝統工芸染織展
2011	平成23	73	紬織着物「山並み」第58回日本伝統工芸展（広島県立美術館蔵）
2012	平成24	74	紬織着物「千鳥」
2025	令和7	現在86歳	

（福田浩子・岡地智子調査による）

4 初めての個展

郡上工芸研究所を出て広島へ戻り、精力的に作品を制作して約1年半後、記念すべき初めての個展が「上向井廣子^{註1} 染織個展」として、昭和45（1970）年12月4日－9日に広島天満屋5階美術画廊で開催された。

出品作品の詳細はリーフレットの情報のみであり、出品作品はわからないが、作者の作品は「着尺と帯、その他」とあり、渡辺久美（染織）および永井鐵太郎（金工）も賛助出品した。

リーフレットには、師の宗廣力三が次のように文章を寄せている。

織は人なり。上向井さんの織物には、上向井さんのすべてが織りなされてあるだけに、その期待は大きい。

当研究所でのひたむきな研鑽と、一すじの糸の「いのち」を大切に作るあたたかい人柄は、きっと素直でみずみずしい、つつましいが暖かい、繊細で鮮烈な、人の体を通してのみ出る健康でいばらない、美しい花を咲かせてあるにちがいない。

着る人をより美しくしようと常に平凡を非凡に努める人上向井さんである。

選ばれた素材、たしかな染め、心こめた織、本ものの仕事がどんなにか人の心に訴えるか、たのしみである。

郡上工芸研究所 所長 宗廣力三

^{註1} 旧姓は上向井、結婚して渡邊姓となる。名は廣子、作家名として渡辺溥子を使用。

また、作者自身も

草木染めによる郡上紬の素朴な美しさは 生活に豊かな潤いを持たせてくれます そんな「郡上紬」に魅せられて 郡上の里の宗廣力三先生に師事致しました

先生からご指導頂いた成果を 私なりにまとめてみました まだまだ伝統に支えられただけの拙い作品ながら

宗廣先生のいつも言われる手織物のもつ精神「やすらぎとねがいのきぬ」を受けついだつもりではございます

これからが出発ですが 一筋の糸のいのちを大切にす
る「こころ」をいつまでも胸に抱いて織り上げていきたい
と思います

尚 私とともに新たに手織物の勉強を始めた渡辺久美
金工の義弟 永井鐵太郎のお二人に賛助出品を頂きました
た あわせてご高覧賜りたく ご案内申し上げます

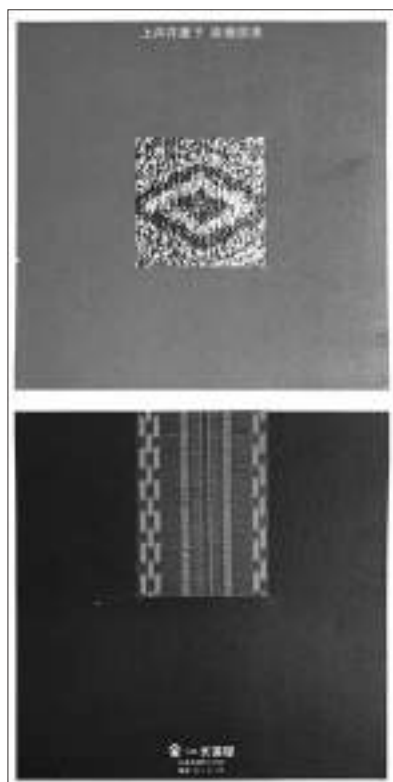
上向井廣子



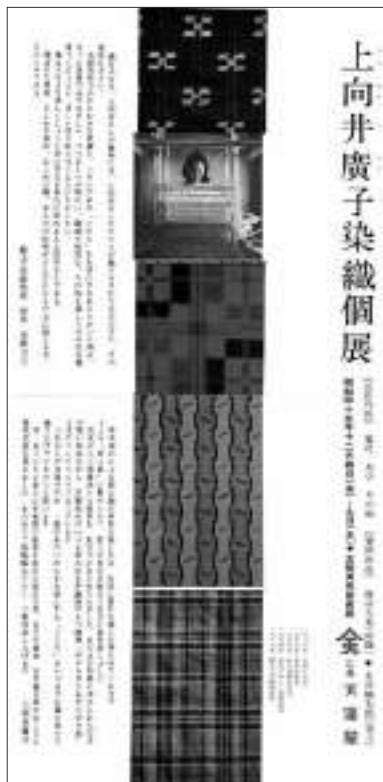
挿図1 細織着物
「上向井廣子染織個展」出品作品のうちの1点

と挨拶文を掲載している。

このリーフレットは中央部にスリットがあり、スリットに差し込まれたスリッパをずらすと、宗廣力三のもとで学んだ郡上織についての説明が見える仕掛けがされている。



挿図2 個展リーフレット (外面)

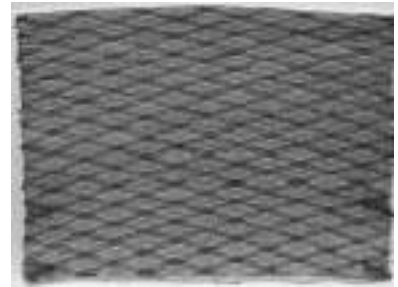


挿図3、4 個展リーフレット (内面)
中央の差し込みをスライドすると郡上織の説明が出てくる仕掛け (挿図4)。



「郡上織のこと 奥美濃・郡上八幡の里は郡上おどりで名高い正倉院文化に象徴される奈良時代から 都と交流をもち 平家の落人が住みついた「郡上の里」にはいまなお古代 大宮びとの雅風と土臭豊かな素朴さがとけ合った独特の文化が生きています 「郡上織」はその一つで 昔落人たちが野蚕糸をつむぎ 草根木皮などで着色 手織機にかけて丹精に織り上げ 普段着として着用しました 星移り八百年 宗廣力三先生は その昔の人々の心をこころとし 草木染め 手つむぎ 手織りを発掘 伝承し 永年の努力により往年の風雅なそして野趣ある美しい織物を世に出し 真価をひろく認めさせました」

独り立ちできる染織の技術を身につけ、作品制作に漕ぎ出した作者の勢いと気概がこもった作品群によって故郷に錦を飾った個展であった。そして、2年後の1972（昭和47）年には「朝風」により第9回日本伝統工芸染織展日本工芸会賞を受賞し（同作は1970年の個展を高く評価した広島市の個人が購入したという）、作品デザイン、緋の染色、製織といった制作作業すべてを一人で行いつつ、日本伝統工芸展と染織展、新作展で作品発表を行っている。



挿図5 絢織着物「朝風」の裂 MB-282

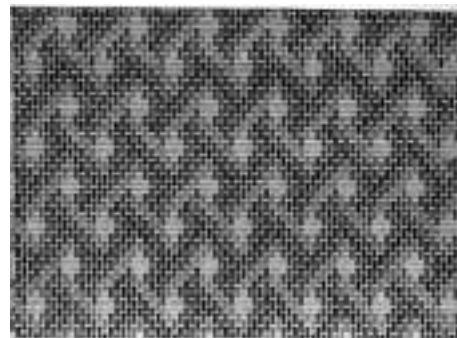
5 作品制作について

染織作品の構想や制作段階が残されることは多くない。当館は着物作品と合わせて一部の図面類を受贈した。

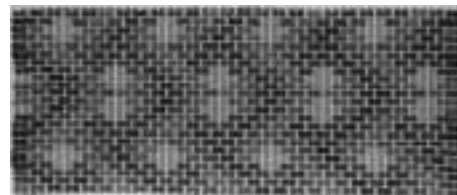
絢織着物「薫風」 1974年 第11回日本伝統工芸染織展



挿図6（口絵1） 絢織着物「薫風」 HB-297

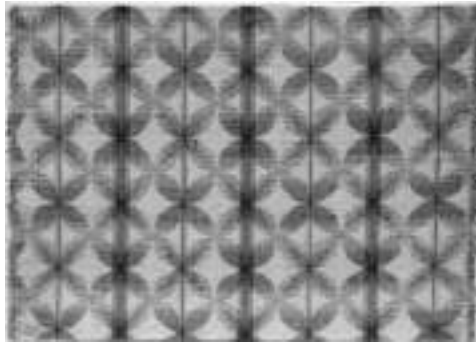


挿図7（口絵2） 絢織着物「薫風」（挿図6、口絵1）の下図 MB-245

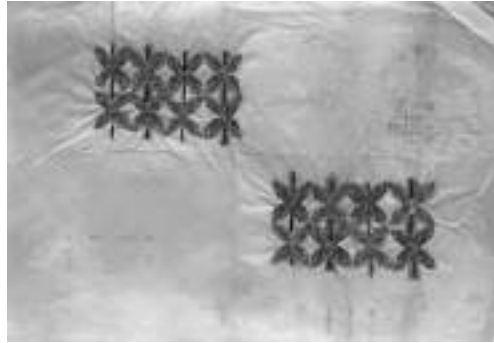


挿図8 絢織着物「薫風」（挿図6、口絵1）の上襟 MB-246
上襟の裂で、着物に仕立てた際に柄が同じ向きになるよう、緯緋糸の向きを変えて、中央で柄を反転させている

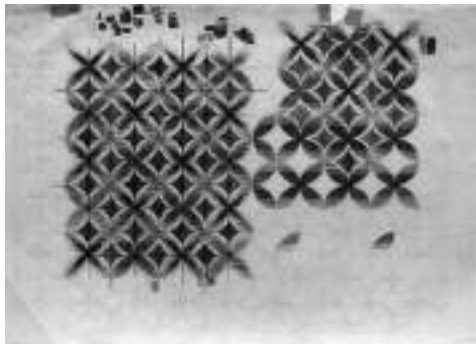
紬織着物「花七宝繫」 1975年 第12回日本伝統工芸染織展



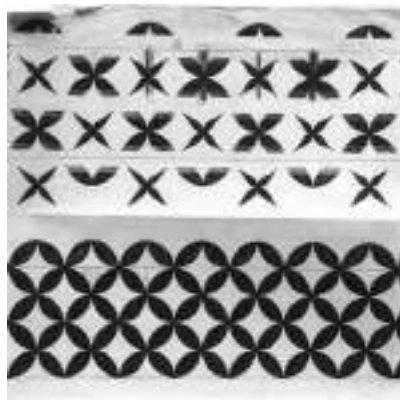
挿図9（口絵3） 紬織着物「花七宝繫」の裂
MB-285



挿図10 紬織着物「花七宝繫」（挿図9、口絵3）の下図 MB-286
文様デザインのイメージ図



挿図11 紬織着物「花七宝繫」（挿図9、口絵3）の
下図 MB-284 挿図10より具体的なデザインと
なった。

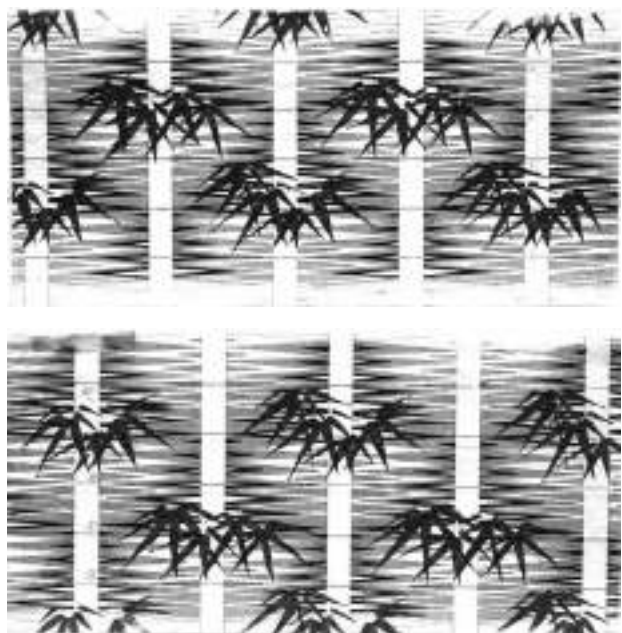


挿図12（口絵4） 紬織着物「花七宝繫」（挿図9、口絵3）の下図
MB-283 2種類の種糸のための下図。2種類の緯糸を2丁の杼
で追っかけて（交互に）織る。

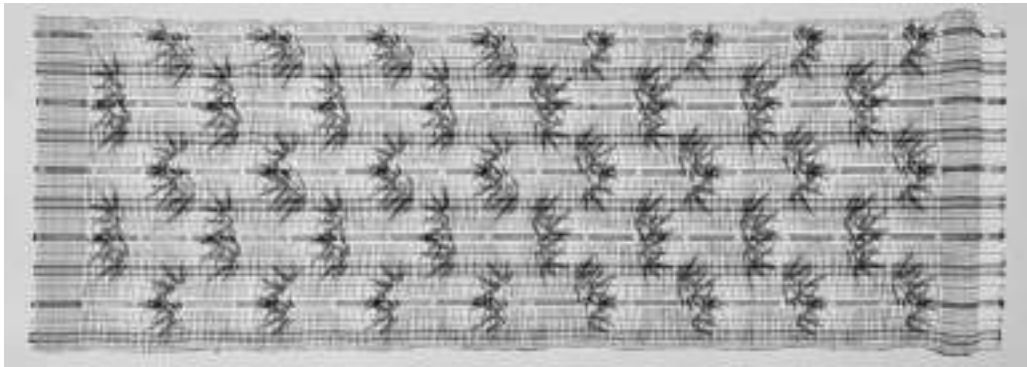
紬織着物「竹林」 1984年 第24回伝統工芸新作展



挿図13（口絵5） 紬織着物「竹林」 HB-298



挿図14、15（口絵6） 紬織着物「竹林」（挿図13、口絵5）の下図
MB-248、249 緋の種糸作りのための下図



挿図16 紬織着物「竹林」(挿図13、口絵5)の上襟

上襟部分のために背中心で模様を反転させている。これにより、仕立てた着物の襟の模様の向きが左右同じになる。

(続く)

(ふくだひろこ／広島県立美術館学芸課長)

謝辞

ご自宅へ訪問しての数回にわたる調査を許してくださった渡辺溥子氏とご家族、愛犬ミミちゃん、そして、渡辺氏に出会うきっかけを作られた元当館次長の村上勇氏、出品情報を丹念に調査し、近年の作品受贈作業をともに行った同僚の岡地智子氏、その他のお世話になった方々に心より感謝申し上げます。

参考文献

渡辺溥子『渡辺溥子作品集』2019年

福田浩子「渡辺溥子の紬と絣の世界」『広島県立美術館友の会会報 色絵馬』第97号、2022年1月

日本工芸会 渡辺溥子 <https://www.nihonkogeikai.or.jp/works/688/> 2025年1月31日閲覧

日本伝統工芸染織展 一覧 <https://www.nihonkogeikai.or.jp/exhibition/textiles/> 2025年1月31日閲覧

東日本伝統工芸展 一覧 <https://www.nihonkogeikai.or.jp/exhibition/higashinihon/> 2025年1月31日閲覧

日本伝統工芸富山展 一覧 <https://www.nihonkogeikai.or.jp/exhibition/toyama/> 2025年1月31日閲覧

所蔵情報

口絵1～6、挿図5～16：広島県立美術館蔵

挿図1～4：個人蔵

作品および資料写真

口絵1、5、挿図6、13：オーシマ・スタジオ撮影

その他：執筆者撮影

広島県立美術館 研究紀要 第28号
BULLETIN OF HIROSHIMA PREFECTURAL ART MUSEUM No.28

発行日 令和7(2025)年3月19日
編集・発行 広島県立美術館
Hiroshima Prefectural Art Museum
〒730-0014 広島市中区上幟町2-22
2-22 Kaminobori-cho Naka-ku Hiroshima City 730-0014 JAPAN
Tel. 082-221-6246 Fax. 082-223-1444
印刷 株式会社 タカトープリントメディア

BULLETIN
OF
HIROSHIMA PREFECTURAL ART MUSEUM

No.28

A Look at Watanabe Hiroko's World of Textile: Amazing Double Ikat Silk Weaving (1) 46
FUKUDA SIDDIQI Hiroko

Dalí and Ingres: A Study of Ingres's "Pensées" as a Clue (9) 38
YAMASHITA Hisana

On the painting of Rai Shunsui's study, by Ota Goan around 1804 (30) 17
SUMIKAWA Akihiro

New Insights into Japanese Painter KODAMA KIBO (46) 1
JINNAI Yuri

2025

HIROSHIMA PREFECTURAL ART MUSEUM
HIROSHIMA JAPAN